
廃人少女とゴシック少女

星空ナルミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

廃人少女とゴシック少女

【Nコード】

N9031X

【作者名】

星空ナルミ

【あらすじ】

引きこもり体質でネトゲ廃人の紅螺柘榴せいらくわくわは同じゲームユーザーのサファイアに会いに行く。しかしそこにいたのは女の子で……真逆な二人の友情？と一人の恋を描く物語。

第0スレめ

世の中にはヲタク、廃人と呼ばれる者がいる。

ここにいる彼女、紅螺柘榴^{せいらくわくじゅう}も廃人と呼ばれる一人である。

人気のネットゲーム「Edelstein」^{エーデルシュタイン}のユーザーでハマりにハマったためいつの間にかネットゲ廃人になっていた、というところだ。

毎日同じゲームユーザーと会話するのが日課であり、今では生活の一部と化している。

「んー…あーサファイア来てる！」

—————

ガーネット：こんばんはーサファイアさん

サファイア：こんばんは、ガーネット。

ガーネット：こんな時間にお会いするなんて久しぶりです

サファイア：そうだね。〇（＾・＾）〇ところでガーネット、一つお願いがあるんだけど聞いてくれるかい？

ガーネット：お願いですか？いいですよ

サファイア：君に会いたい

—————

「えっ？私に…？」

一瞬頭の中が真っ白になった。あいたいなんて言われたのは初めてで、しかもそれが好きな人。廃人な私をいくらサファイアでも嫌と言っただろうな。

—————

ガーネット：私は可愛くも綺麗でもないし、会っただなんてとんでもないです（＜―＞）

サファイア：そうか？僕は君がどんな姿でも気にしないよ○（＾－＾）○君に会ってみたい。明日よかったら会いに来て。●●●駅前
で待ってる。

—————

返事を書き込まずパソコンを閉じると柘榴はベッドに沈んだ。

「明日か……」

第0スレめ 2

翌日。

私は久しぶりに外に出ることにした。…と言っても太陽の光が眩しいので極力目立たない格好、紫外線カットの為にフードを被って、だけれど。

「（…サファイアどんな格好してくるんだろう…というかそもそも実際の性格とかどんな人とか知らないし！…怖い人だったらどうしよう…）」

「…ガーネット…さん？」

「Σふえっ？」

びくつとして振り返るとそこには青年ではなく代わりに黒ずくめの少女が立っていた。

「…え…？サファイア…さん？」

「…ってことはあなたがガーネットか。なるほどー、如何にもって感じの廃人さんね」

「Σはあ！？初対面でいきなり廃人ってなによ！！私が見たいのはサファイアなの！あんたみたいな黒ずくめに会っな…！？」

「まったく、人の話を最後まで聞きなさい。…わたしはサファイアに頼まれたの。代わりに会いに行ってほしいって」

「そんなのありえない！（怒）サファイアに会わせて!!」

「まーまー、そう怒らずに。あなたの名前は？」

「…赤螺柘榴」

「せきらざくろ、ね。わかった。今日から柘榴はわたしの友達だから」

「Σはあ!？」

「わたしの名前は碧依瑠璃あおいるりだから。よろしく、柘榴ちゃん」

無理やり手を握らされ握手。

にこにこ笑う瑠璃にいらしつともとりあえずその場から移動することになった。

ずっと引きこもっていた所為なのか、瑠璃の言う流行りものだとか、この店はいいだとか、そういう話を聞いてもついていけない。どう反応したらいいのかわからず迷っていると突然瑠璃がこんなことを口にした。

「…柘榴ちゃん、楽しくない？」

「いや…そんなことはないけど…あえて言うなら」

「言うなら？」

「突っ走りす」

「ああっ！」

…ぎ、と言おうとしたが遮られた。私、なにかしたっけ？

「柘榴ちゃん！ケーキバイキング今日までなの！付き合って！」

「ちよっ…瑠璃！？」

言われるがまま連行され連れて行かれる。

第0スレめ 3

あれから数時間。私は瑠璃にケーキバイキングに付き合わされたあと、あちこち振り回された。

ゲーセン、ボーリング、カラオケ、ビリヤード、ダーツ等々…瑠璃は疲れた表情一つ見せずにどれも楽しんでいた。私のことを気にしてるのか時々大丈夫？と声をかけたりしてきたけれどあまり答えなかった。

帰り際、瑠璃はまたね、と手を振って帰って行ったのを見送り、私も家へと向かった。

――――

ガーネットさんが入室しました

サファイア：こんばんは、ガーネット。今日は会ってあげられなくてごめんね。急用が入ったから代わりに彼女に任せただけね…

迷惑だったかな？

—————

「蒼^{そう}！」

「兄さん…どうかしたの？」

「いや、任せちゃって悪いなと思ってね。楽しいかい？」

「うん、まあね。兄さんはもうサファイアとしてガーネットと話さないの？」

彼女の名前は蒼^{そう}。俺の妹だ。おつと紹介が遅れた。俺の名前は黒蛸^{くしや}紫遠^{うしおん}。サファイアとしてネットゲーム「Edelstein」にいたが諸事情で今はサファイアを妹である蒼に任せている。

「ああ、まだ俺は出る幕じゃない。」

「…？」

「蒼にもそのうち分かるさ（笑）」

「んー……」

――――

ガーネット：サファイアさん、来てくれると思ったのにお会い出来なくて残念です（<|>）…ラピスラズリさんって？

サファイア：ああ、君は知らなかったのか…ラピスラズリは同じゲームユーザーさ。（^ - ^）。

――――

「ゲームユーザー…か。どんな人なんだろう……」

美人な人…とか？

ぐるぐると考えを巡らせたけれどわからなかったのとおりあえず「仮眠」だけと寝ることにした。

第1スレめ

翌朝。パソコンを起動したら新着メール一件と表示されていた。

「メール？」

――――

柘榴へ

やつほー元気？

昨日はありがとうー

あ、アドレスはサファイアからきました（笑）

また一緒に出かけようね！拒否権はないから！それじゃねー

瑠璃

――――

「……………（怒）」

…瑠璃からのメールにむかついたので頭を冷やしに行こうか。

メールを速攻ブロックフォルダーに入れると私は気分ごなしに買い

出しへ向かった。

「なに食べようかな…」

廃人、と言えどちゃんと食事は取らないとね。…ん？あの人…

視線を向けるとちよつと先に青年がいるのが見えた。多分年齢は同じくらいだろうか…

「（同じ年くらいかな…）」

「ん？…こんにちは（微笑）」

「あっ…こんにちは」

「そんなに緊張しなくてもいいよ（笑）この近所の人？」

「…はい…」

「ここで会ったのも何かの縁かもね。僕は黒蛸紫遠。君は？」

「赤螺柘榴…です」

「柘榴ちゃん、ね。おっと、時間だからそれじゃ僕はこれで。またね」

にこやかに去っていく姿に柘榴は無意識にサファイアを重ねていた。

第1スレめ 2

あれがサファイアだったらしいのに。一瞬そう考えた瞬間首を振って考えをかき消した。

「（だめよだめよ柘榴。あれはただの好青年よ！サファイアなわけがないんだから…！）」

「ん？あーっ柘榴ちゃん！」

「瑠璃！？」

「はい瑠璃ちゃんですよー 柘榴ちゃん、こんなとこでなにやってんの？買い出し？」

「（絡まれたら厄介だから適当に答えよう…）そ…そうよ。瑠璃は？」

「私も買い出しー。ネギと肉がなくてさー」

あはは、と笑う瑠璃を見て自炊だよ…ね？なにを食べてるんだろう…と思ってしまった。瑠璃のことをあまり知らないまま（無理やり）友達にされたけれど、瑠璃は気にしていないし…いいのかな？

「じゃあそろそろ帰るね！またね！」

「柘榴ちゃん!？」

瑠璃が何か呼んだ気がしたけれどわたしは全力で走った。もちろん、かなりかなり久しぶりに。

最後に走ったのはきつと中学最後以来だろうか。

「はあ…はあ…ここまで来れば…大丈夫…でしょっ…はあ」

息を整えつつ家へと帰路を急ぐ。

しかし途中で、人とぶつかった。

「いたっ…」

「ご…ごめんなさい!大丈夫…」

はっと顔を上げて見ると相手はきょとんとした表情でこちらを見ていた。

「ボクは大丈夫。おねーさんこそ大丈夫?」

「え…ええ平気よ」

「良かった、おねーさんお名前は?」

「紅螺柘榴…です」

「ざくろちゃんか…可愛い名前だね。ボクは黒蛸蒼だよ」

「黒蛸…？」

ん？どこかで聞いたような…兄弟？まさかね…

「おねーさん？どうしたの？」

「え？うつんなんでもない。…あ、もう行かないと」

「そっか、残念…またね？おねーさん」

「…うつん／＼／／」

慌てて走って行くと少年…いや少女は呟いた。

「紅螺 柘榴…あのこ彼女がお兄ちゃんが言ってたガーネット……なかなか可愛らしいね」

少女は、ふふつと笑うと柘榴とは反対方向に向かって歩いて行った。

「ただいま」

「おかえりーお姉ちゃん！ねえ外に遊びに行こうよー」

「あとでね」

「えー！今がいい！」

「…っさいな、やめてよ！あたしに関わらないで！」

少し強めの口調で言うとお水癒は黙った。紅螺 せきろみゆ 水癒は柘榴の妹だ。
幼く、甘えたい年頃の彼女は姉である柘榴に懐いていて、遊んでも
らいたいと思っっているらしい。引きこもる前まではよく遊んでいた
が、引きこもるようになってからは水癒を構ってやったりどこかへ
連れて行くことは全く無くなった。母親からは水癒を構ってと言わ
れるものの柘榴本人は気にはしておらず、今も関係は変わってい
ない。

第1スレめ 3

「お姉ちゃん…」

「なに？まだなにか用？」

「…なんでもない」

水癒はそう言うとりビングへと歩いて行った。

「なによ、もう」

言いたいこと言えはいいのに。

部屋に戻ってパソコンを起動させ、またチャットを始めた。これが今に至るまであたしの繰り返してきた生活だ。

しかし瑠璃に会ってから此処数日は、外に出るようになった。あたしらしくない、と思いつつも久々の外の世界に少しでも嬉しさを感じていた。

ガーネットさんが入室しました

サファイア：こんばんは、ガーネット

ガーネット：こんばんは、サファイア^^

ラピスラズリ：こんばんはー

ガーネット：ラズリ、こんばんはー

サファイア：ガーネットは普段なにをしているの？僕はここにくるのはもちろんだけれど仕事をしているよ

ガーネット：あたしはここに来る以外は部屋にいてネットをしているくらいかな。ラズリは？

ラピスラズリ：私もガーネットと同じだよ。けど、服を買いに行くかな。

ガーネット：そうなんだ、ラズリっておしゃれね。ねえ、みんな家族は？

サファイア：僕は妹と二人暮らしだよ、父と母は海外にいるからめったに帰ってこないんだ。

ラピスラズリ：私は父と姉と三人で暮らしてるよ。母はいないの。
ガーネットは？

ガーネット：あたしは父と母と年の離れた妹がいるわ。でも全然話してない…嫌いな

サファイア：どうして？

ガーネット：上辺だけの優しさだもの、だから…嫌い

あたしがそう書いたのが気まずかったのか、いつの間にかラピスラズリは居なくなっていた。きつとサファイアにも嫌われた。こんな暗い内容しか書き込めないなんてショックを受けさせてしまったに違いない。

あたしがパソコンを閉じようとしたその時だった。

サファイア：優しさに上辺なんてないよ、ガーネット！君の家族は君を嫌いなんじゃない…君に接したいんだ

ガーネット：どうしてそこまであたしのことを…？他人なんだから普通なら見捨てたっていいのに

サファイア：君のことをほっとけないんだ…よかったら僕のところ
に連絡をして？話をしよう？

サファイアは連絡先を書き込んでくれた。急いでメモをすると
あたしはありがとと書き込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9031x/>

廃人少女とゴシック少女

2011年11月12日12時10分発行